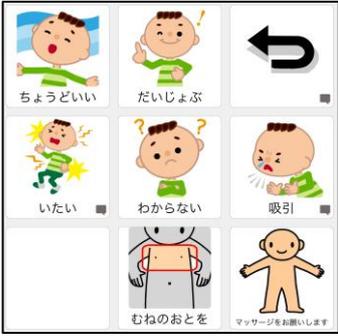


1人1台端末の活用による実践事例

(特別支援学校)

学校名	岡山県立早島支援学校	実践者名	岬 和希
実践場面 (教科、領域、行事等)	日常生活場面・個別学習		
単元・題材名	自立活動「スイッチを操作して相手に伝えよう」		
学習目標・ねらい	自分の思いや自分の状態を周りの教師や看護師に具体的に伝えることができる。		
対象の児童 生徒の実態	<ul style="list-style-type: none"> ・ 吸引や定期的な体位変換が必要な生徒である。表出が難しくこれまでは看護師や教師からの問い掛けに対して答えることで伝えており、結果として受け身になることが多かった。 ・ 随意で動かすことができる足先にスイッチを設置し iPad と接続することで、スイッチコントロールで VOCA アプリ「Droptalk」を操作し、思いを伝えることができてきた。 		
活用の概要 (使用アプリ名を含む) ※写真も掲載する			
<p>○コミュニケーションツールとしての Droptalk</p> <p>生徒が自分の体調や痰の有無についてを Droptalk で伝えられるように一緒に練習を進めた。学校ではいつも決まった時間になると吸引をすることが多いが、本人に尋ねて、吸引をするかどうかの判断を Droptalk で伝える練習をした。また、学習場面でも Droptalk を使うようにしたことで、iPad を使うことのメリットを理解し、少しずつ自分から伝えるようになってきた。また、<u>年度末頃には、不安に思う時には吸引を依頼する等、自分からシンボルを選んで伝えることができてきた。</u></p>			
			
<p>○身体に違和感を感じた時の行動の変化</p> <p>伝えたいことを表しているシンボルが無く、仕方なく別のシンボルで伝えようとしている場面が何度か見られ、その際には本人の思いを伝えられるようなシンボルを新たに作成した。例えば、「吸引」を何度も言い続ける場面があり、本人と話をすると「吸引をしてほしいのではなく、違和感を感じるから見て欲しい」ということが本当に言いたい内容だった。そこで、<u>「胸の音を聞いてください」という本人が本当に伝えたい内容をシンボルで作ると、次から作成したシンボルも上手に使いこなし、違和感を感じた際に予防的に伝えることができ始めた。</u>以前であれば、伝わらなければ諦めたり、不機嫌そうにしていたが、iPad を使えば伝えられると諦めずに伝えようとした様子だと考えられる。本人にとって、iPad を使うことで伝わると実感していることが分かる場面となった。</p>			
			
活用のポイント・改善策等			
<p>○iPad の活用について</p> <p>iPad を使うことで、<u>受け身だった生徒が自分から発信したり、依頼したりする機会が増えた。</u>授業中に自分からシンボルを選んで発言することも増え、教師をはさんでやり取りするという方法から、<u>スイッチを押して自分から直接伝える方法へとシフトしていった。</u>自分でできることが増えたという成功体験を積むことができ、何事にも積極的に取り組むことができるようになった。</p>			